朝鮮神宮の鎮座地選定

— 京城における日本人居住地の形成および初期市区改正との関連から —

SELECTION OF THE SITE FOR THE *CHOSEN SHRINE* 1912-1918Its relations to development of Japanese settlement and
the early urban improvement in *Keijo* (*Seoul*)

青井哲人*

Akihito AOI

This paper focuses upon the selection of the site for the *Chosen Shrine*, a shinto shrine built by the *Government-general of Chosen* in 1925. Although the northern foot of *Nam-san hill* was once selected and designs for the precincts were completed by the end of 1915, the government engaged *prof. Chuta Ito* to make him conduct the second investigation in 1918 and the western part of *Nam-san hill* was finally selected. This paper discusses the backgrounds of the difference of these two conclusions from the viewpoint of the development of Japanese Settlement and the early Urban Improvement in *Keijo*.

Keywords: *Japanese colony, Keijo(Seoul), Chosen Shrine(shinto shrine), settlement, urban improvement, Chuta Ito*
日本植民地、京城、朝鮮神宮、居留地、市区改正、伊東忠太

1 本稿の課題

1-1 はじめに

韓国・ソウルの南山は、周知のように、日本植民地期にはその西部を中心とする広大な領域が官幣大社・朝鮮神宮の境内地¹⁾であった。遡れば、南山の北側山麓一帯は、明治10年代より漢城(李朝の都城)内における日本人居住地形成の端緒が開かれた地域であった。この日本人居住地の背後の山腹に鎮祭された南山太神宮が、のちに国幣小社・京城神社となる。大正14年、同じ南山に朝鮮神宮が鎮座すると、両神社の境内は様々な時機を得て整備・拡張を繰り返し、南山の環境を変容させていくが、さらに日中戦争開戦の後には、龍山の軍用地に近い西南山麓に、京城護国神社の造営が進められる。李朝の漢城にあつては風水地理説上の案山であり一種の禁地であった南山は、植民地朝鮮の首府・京城にあつて国家神道体制下の複数の神社の境内地として改編されていくのである。そして、大規模な土木事業とも言うべきこれら神社の造営は、境内の境域にとどまる問題ではなく、李朝時代に一定の完成をみていた漢城の都市空間や景観を改編していく植民地期のより大きな過程の中に、重要な位置を占めたであろうことが予想される。

本稿は、こうした観点から、近代戦前期における南山の変容過程のうち、とくにその神社境内化を決定づけたと言ってよい朝鮮神宮

の鎮座地選定を検討対象としたい。

さて、日本植民地における神社造営に関する研究成果は未だごくわずかであり²⁾、また都市改編過程において神社の占める重要性が強調されることもほとんどない³⁾。こうした状況にあつて、植民地期の京城における都市空間再編の個別的事例の一つとして朝鮮神宮の鎮座地選定をとりあげた五島寧の論文が注目される⁴⁾。五島は、鎮座地選定において漢城(京城)の持つ既存の歴史的・文化的意味がいかに軽視されたかを論じているが、しかしその論述は神社誌類などから鎮座地選定に関する記述を拾い、地誌・地方史類から南山に関する記述を抜き出す程度にとどまっており、造営の主体、鎮座地選定の具体的な経緯、評価基準、境内・参道計画などを明らかにした上での考察ではない。本稿ではこれらの点を資料に基づいて具体的に明らかにしつつ、それを植民地期における京城の都市再編過程の中に位置づけることを目的としたい。

1-2 朝鮮神宮創建の概略と本稿の課題

鎮座地選定の経緯の詳細については次章以下で述べるが、ここでは明治45年～大正14年にわたる朝鮮神宮造営の全過程のあらましを『朝鮮神宮造営誌』などの資料⁵⁾によって整理し、本稿の対象とする時期や課題をいくらか明確にしておきたい。

いわゆる日韓併合は明治43年8月だが、朝鮮半島の総鎮守の創建

* 神戸芸術工科大学環境デザイン学科 助手・工修

Research Assoc., Dept. of Environmental Design, Kobe Design Univ., M. Eng.

に向けた総督府の動きの端緒として確認できるのは、明治45（大正元）年度朝鮮総督府予算への「朝鮮神社及総督府庁舎新営調査費 三〇、〇〇〇円」の計上である⁶⁾。「総督府庁舎新営」とは、旧居留地内の倭城台町に置かれていた総督府の移転新築を指す。移転先は、言うまでもなく李朝の正宮・景福宮の正面であるが、朝鮮神宮造営と総督府新庁舎建設という総督府の二つの大事業が、一対の検討事項として着手されていることは、それが朝鮮の植民地統治確立に不可欠な一対の施設と認識する総督府の態度だけでなく、都市計画上の配慮をもうかがわせる点で注目しておくべきであろう。

「調査費」は大正2年以後も同4年まで継続して計上されたが、この間、総督府は内地主要官国幣社の視察、材木の単価や運搬費あるいは大工職人の雇用についての調査、鎮座地の選定、そして社殿および境内・参道配置の略設計を行っている⁷⁾。造営の基本的準備がこの段階ですでに一応完了したことになるが、このとき鎮座地に選定されたのは倭城台（南山の北側山麓）であった。

こののち、大正8年7月、創立の旨の内閣告示がなされる。

一 朝鮮神社

祭 神 天照大神
明治天皇

右神社ヲ朝鮮京畿道京城府南山ニ創立シ社格ヲ官幣大社ニ列セラルル旨 仰出サル⁸⁾

この時点での社号は「朝鮮神社」であるが、のち大正14年6月の告示によって「神宮」号への改称があり⁹⁾、竣工は同年10月の鎮座祭を間近に控えた同月初であった。

ところで、創立告示に言う「南山」は、大正4年度までの準備過程での結論であった倭城台（北側斜面）ではなく、漢陽公園（西側斜面）を指す。総督府は、大正7年度の社格・祭神の詮議と平行するように、東京帝国大学教授・伊東忠太を朝鮮神宮造営の「顧問」として囑託、彼に鎮座地の検討をさせ、結果的に当初とは異なる決定を下したのである。以上の経緯は、鎮座地選定に対する政府の慎重な態度を示唆するに充分である。本稿では二度にわたるこれらの鎮座地調査を各々、第一次、第二次鎮座地選定と呼んで検討する。そして本稿の主要な論点は、これら二度の調査における結論の相違を、京城の都市空間とその変容過程のなかでいかに評価するかにある。

2 第一次鎮座地選定と旧日本人居留地

2-1 第一次鎮座地選定の経緯と評価基準

大正4年度までの造営準備期間における鎮座地の検討が朝鮮総督府においてなされたことは間違いないが、それに携わった主要な人物ないし組織を明らかにしうる資料は見出していない。

ここでは『朝鮮と建築』誌上での岩井長三郎（会計局営繕課技師、朝鮮神宮造営中に土木部建築課長、ついで内務局建築課長）の説明によって第一次鎮座地選定の経緯および評価基準と、選定された土地に対応した境内や参道の計画方針を見ておこう¹⁰⁾。

まず、「明治聖代」よりの交渉関係と統監府設置以来の「政治の中心」としての京城が選ばれ¹¹⁾、ついで、京城において、「背面山を負ひ土地幽邃地域広闊にして、眺望の佳絶なるべきこと」を基準に鎮座地を調査した結果、数カ所の候補地があげられたが、「南山麓倭城台の十萬坪。および「景福宮の奥地、北岳山麓の十萬坪」の2カ所が選定された。これ以外の候補地が幾つあり、またどこであったか

は不明だが、「地域狭小にして雄大を欠き、或は土地卑濕にして高潔ならず、又は京城市街を中心と連絡に不便なる等の不備」により斥けられたという。評価基準は、「背面山を負¹²⁾う」という地形上の特質、一定以上の面積、境内からの眺望、市街中心部との連絡の便、といった物理的・視覚的なものに概ね占められていることがわかる。

しかし、李朝の正宮・景福宮の北側が有力候補となっていることは、既存都市の歴史的文脈との関連という点で問題を含むだろう。この候補地は、社殿南面が可能であることが利点とされたのだが、参道建設の困難が最大の欠点と判断され斥けられている。景福宮はすでに明治45年には総督府へ移管済みとなっており、同庁舎の新築移転先も同年度中には景福宮内に決定されていたから¹²⁾、もし景福宮背後の北岳山麓が鎮座地となれば、境内と市街地、境内と総督府庁舎との連絡を整理しようとする以上、景福宮内のかんりの改造が避けられなかったであろう。

逆に、南山北側山麓の倭城台については、岩井は上記の評価に加えて「幾多の記念すべき史実を有して、回顧追慕の禁じ難きものある」としているが、これは、先述の五島論文も指摘するように、明治10年代よりこの地に城内で最初の日本人居住地が形成されたことを指すと同時に、この地が文禄の役における築城跡であるとの説を指すのであろう¹³⁾。なお、この立地条件では社殿が完全に北面することになるが、これは内地の由緒ある神社にも南面しない実例が多いことから必ずしも南面が絶対条件でないと譲歩している。

2-2 境内・参道計画と旧居留地

ついで参道の計画をみよう。図1は大正4年当時の市街地および南山の状況を示し、その上に岩井の説明に基づき境内位置と参道計画を描き重ねたものである。「第一参道」は朝鮮銀行前から旭町二丁目を南へ進み、ここから山麓に沿って東へ折れ、京城神社の鳥居付近へ出て、同社下の貯水池に神橋を架けて境内に至る、という経路である。「第二参道」は、日の出学校前より当時の総督府庁舎前を通る道路を改修して先述の神橋に出る計画であった。境内の正確な範囲は特定できないが、総督官邸の「裏手」の「高處に当たる傾斜の緩なる處に定め」、「附近一帯を神域に入れ」ることとした、その範囲は「憲兵隊の境に至る」というから、大略、図1に図示したような範囲であったと推測される。さて、ここではこの鎮座地選定および参道計画を、倭城台周辺の市街形成過程に照らして把握しよう。

漢城の城内での日本人居住地は図中のA（旧領事館所在地）の周辺に明治16年の開市前後より形成されはじめる。同18年に諸種取締の便宜上制定された日本居留地範囲は、『京城府史』の記述に基づき推定すれば図1に示すとおりである¹⁴⁾。なお、漢城には釜山、元山、仁川のごとく両国間の条約に基づく狭義の居留地が設定されたのではないが、本稿では『京城府史』が用いる「居留地」の語を便宜的に用いることとする。

明治10年代末に公使館、領事館（のち構内に郵便局、警察）、そして明治20年代から30年前後までの時期に総代役場、商業会議所、小学校、東本願寺、あるいは憲兵司令部などが設置されていく。この地域を、ここでは便宜上「倭城台周辺」と呼ぶことにするが、居留地形成以前の同地域は、もちろん「鮮人家屋」が立ち並んでおり、以上の官庁や主要建築物の他、日本人店舗も、当初はそれらの借用が仮建築であったという。

倭城台の南山中腹にあった京城神社は、大正2年まで南山太神宮

大正2～4年度になされた第一次鎮座地選定において決定された境内位置と参道計画（第一・第二参道）を示す。図は大正4年当時の倭城台、本町、南大門通りの周辺を示すもので、大正4年測図大正6年製版地形図（陸地測量部）、および『京城府史』第二巻（京城府、1940）に基づき復元的に作成した。右の表も主に『京城府史』第二巻の記述に拠る。

さて、日本人の流入は明治28年頃から急増する¹⁸⁾。図1で、本町が南大門通に出会う位置の三角形の広場に面して、主要な官庁・公共建築物が集中しているのが分かるが、これらは明治30年代から40年代にかけて倭城台周辺より移転・新築されたものである。たとえば、領事館は明治29年にここへ移転し、その庁舎が明治38年の第二次日韓協約（保護条約）によって京城理事庁、ついで同43年の日韓併合条約ののち京城府庁に充てられる。また明治39年には、倭城台周辺にあった日出小学校に加えて、南大門の西に南大門小学校が開校しており、さらに政府中央銀行である朝鮮銀行の建築は、辰野金吾の設計で明治45年に竣工し、大正2年度に本町沿いから移転してきたものである。この一帯をここでは「南大門通周辺」と呼ぶが、この地域は朝鮮銀行などの洋風建築によってその景観を一変させた。つづいた。

朝鮮神宮の第一次鎮座地選定がなされた大正1～4年当時の京城南部の様相は、こうした居留地時代からの市街地・山地の改編過程の所産である。いま先述の参道計画を振り返れば、まず第一参道は明治30年前後から一変していった新しい日本人街の中心であった南大門通周辺の京城府庁・朝鮮銀行前に発して境内にいたる計画である。これに対して第二参道は、居留地成立当初のいわば旧市街である倭城台周辺を抜けて境内にいたる道であり、また総督官邸および当時の総督府庁舎に積極的に関連を持たせようとしたものだったと見られる。この総督府庁舎の前で二つの参道が合流するわけだが、同庁舎は先述のとおり景福宮前への移転がすでに明治45年度中に決定しており、岩井長三郎によれば、その移転後の跡地は「神苑に編入」し、また総督官邸（旧公使館）は「日鮮関係上最も重要なもの

施設名称	旧用途	竣工年
------	-----	-----

▼倭城台周辺

総督官邸 統監官邸←公使館 *1

▼倭城台周辺

総督官邸	統監官邸←公使館 *1	
東本願寺	-	明治 18
京城神社	南山太神宮	不明 *2
陸軍兵舎	-	明治 31
総督府	統監府	明治 37
日出小学校	-	明治 40
高等女学校 *3	-	明治 40
警務総幹部	-	明治 41
		明治 43

▼南大門通周辺

京城府庁	京城理事庁・領事館	明治 29
商業會議所	-	明治 30
中央郵便局	-	明治 33
南部警察署	-	明治 35
南大門小学校	-	明治 39
朝鮮銀行	-	明治 45
朝鮮ホテル	-	大正 3

- *1 西大門外より明治18年移転。
- *2 明治23年に布教所を設置。
- *3 同地にあった大日本公立尋常小学校（明治28～）は取壊、新たに日出小学校を創立。

左圖凡例

A: 旧領事館所在地（明治18～29）。旧領事館跡内には仁川郵便局出張所（中央郵便局の前身）、警察署（南部警察署の前身）があった。

B: 旧総代役場・商業会議所（明治23～30）所在地。

のにして永久に記念すべきものなるが故、之が保存を講じて記念建物とし朝鮮関係の図書参考品等を陳列して公開せんと計画したという²¹⁾。この他、居留地の水道敷設を目的に設けられた貯水池に、参道の終点となる神橋を架すという計画や、居留民の氏神としての京城神社に朝鮮神宮境内を隣接させる点なども含めて総合的に評価すれば、第一次鎮座地選定とこの段階での境内・参道計画は、きわめて率直に、明治17年頃から日韓併合にいたるまでの30年弱の間の日本人居住地の形成過程と主要な庁舎・公共建築の配置を尊重し、またそれらに由来する一種の記念性を参道や境内に付与しようとするものであったと結論することが可能であると思われる。岩井が倭城台について言う「幾多の記念すべき史実を有して、回顧追慕の禁じ難きものある」という先述の言葉は、こうした具体的な計画内容にも反映していると言えるだろう。

しかし、こうして「略設計」を含む造営準備の大略が完了したにもかかわらず、総督府は朝鮮神宮造営費初年度にあたる大正7年度に、再び鎮座地の調査を行う。以下ではこれを詳細に検討したい。

3 第二次鎮座地選定と京城の都市改編

3-1 伊東忠太による鎮座地選定

伊東忠太が朝鮮神宮の設計者（顧問）であることはよく知られるとおりである。彼は、大正7年4月4日付で「朝鮮神社設計二関スル事務ヲ囑託」され²²⁾、顧問として設計・監督に携わっている。当時東京帝国大学教授であった彼は、同時期に明治神宮（大正9年竣工）の造営にも関与しており、神社建築の権威的存在であった。

ところで、朝鮮神宮造営に関して記した複数の文献資料が、朝鮮神宮の鎮座地は、伊東忠太によって実地調査・研究の末選定されたとしている²³⁾。その具体的な検討の内容の一端を伝える断片的な資料が、伊東家所蔵資料中に残されている²⁴⁾。同資料中に含まれる朝鮮神宮関係の記録には次のようなものがある。

- ① 鎮座候補地の比較検討表
- ② 「朝鮮神社」と題した文章のメモ
- ③ 大正7年春の朝鮮出張の旅程表（上述）
- ④ 社殿および境内配置計画のエスキス 6点
- ⑤ 京城地形図（大正4年測図同6年製版、陸地測量部、1:10,000）

このうち①～④は「大正六年頃より」、「大正六、七、八年」と題された二冊の自筆ノート中に必ずしもまとまりを持たずに記され、鉛筆書きだが、エスキスには黒インクと水彩が施されている。

まず③の朝鮮出張の旅程表だが、これには4月22日～5月4日のものと、5月13日～21日のものの二種類あり、史料の前後関係などから前者が当初予定、後者が変更後の日程と推定される²⁵⁾。もっとも後者が最終的な日程であったとは断言できないのだが、4月4日付で辞令を受けた後あまり時をおかずに彼が実際に京城に赴いたことはおそらく間違いない。

①は8箇所の候補地を比較評価した表で、⑤の地形図には7箇所の候補地が示されている。①では「I～VIII」の番号が付き、⑤では「一～七」の番号を記した紙片が候補地の位置に糊付されている。地名がなくどの場所を指すか不明な「VIII」をのぞけば、①と⑤とでは地名は過不足なく一致するが、しかし地名と番号との対応が異なり混乱を招くので、ここでは⑤にしたがって「1～7(8)」と整理した。①の傍らには「神社敷地の要点」と題した評価基準12カ条が

記されており、〈甲〉（適当）、〈乙〉（やや適当）、〈丙〉（不適）の評価が各々記されている。この検討表を整理したのが表1である。鎮座地候補とその数については複数の異なる記録・説があるが²⁶⁾、伊東関与の時点では候補地が7（ないし8）箇所であったことが分かる。

②は、

敷地候補地七カ所に就て之を比較批判するに当り、先づ神社建築の理想的敷地たるべき十三カ條の要項を列挙し、之に対して若干の要項を充たし居るやを考究すへし

との文章である（「十三カ條」とあるのは「十二」の誤りか）。伊東は検討結果を総督府に報告したはずであるから、おそらく、①と②はそのための資料として作成した文書の草稿にあたり、⑤もあわせて提示した資料の下図が控えてあったものと推測される。

この検討表の評価が、伊東が最終的に提示したであろう検討結果にどれほど近いのか、またその評価が政府の最終決定に対してどれほど影響力を持ったか、といった点がやはり問題となるが、これについては一旦おき、これらの資料を細かく読みとっていきたい。

まず候補地について若干の説明を加える。1:三清洞とは北岳山麓で、景福宮の東北方向にあたる。3:社稷壇は、景福宮の西に太祖3（1394）年に設置された、土地と穀を祀る李朝の国家的祭祀施設の境域内である。大正7年当時は総督府の所管（国有）であり祭祀は廃されていた²⁷⁾。4:奨忠壇は、明治28年の閔妃殺害事件（乙未の変）の忠死者を祀るため、明治33年に設けられた祭祀施設の境域内を指し、同様に国有化されていた²⁸⁾。7:孝昌園は18世紀末の造営にかかる李朝第22代正祖の一男・文孝世子の墓園の境域内である。そして、2:景福宮とあるのは、⑤の地形図から、宮城内ではなくその北側の北岳山麓であることが分かり、第一次選定時の「北岳山麓」とおそらく同一である。同様に、5:倭城台は第一次選定時の「南山麓倭城台」と一致する。おそらく、伊東自らが短い調査期間中にこれら7つの候補地を抽出することからはじめたと考えるよりも、第一次選定と同様の候補地を総督府側から提示され、その比較評価を委ねられたと考えるのが適当であろう。なお、候補地に李朝の宮殿や祭祀施設の内部ないし隣接地が多いことを指摘しておく。

次に、表1の検討表を評価基準の側から読みとり、鎮座地検討の内実を明らかにしていこう。

まず、〈d〉:「小高キ地ニアルコト」はほとんどすべての候補地に〈甲〉評価がついており（6カ所）、ついで〈g〉:「市街地雑路ノ巷ヨリ隔離サレ居ルコト」（5カ所）、〈j〉:「市街ニ対シ火災ノ慮アル風ノ方向ニアラザルコト」（5カ所）、さらに〈c〉:「鬱蒼タル森林ヲ有スルコト、トクニ背景ニコレアルコト」（4カ所）とつづく。おそらく、〈d〉をはじめとするこれらの基準は、候補地を比較検討する評価軸である以前に、候補地を抽出する際の与条件であったと考えられる。またその意味では、候補地に李朝の宮殿や祭祀施設の内部ないし隣接地が多いことは、それらが持つ歴史的文脈を第一義に念頭に置いたというよりは、こうした地形上の特性を中心とする候補地抽出の与条件から導かれた結果であったと考える方が近いだろう。

次に、〈e〉および〈f〉は、それぞれ社殿南面の可不可、清流の有無に関するもので、いずれも「可成ハ」との譲歩付きだから絶対条件でなかったことが分かる。〈e〉については、南面しうるのが〈甲〉、北面せざるをえないものが〈丙〉、〈乙〉はいずれでもないものと考えられる。図2には各敷地で想定される本殿の向きを、こう

した評価および実際の地形から推定して示した。

〈a〉は祭神との縁故の有無、および「不祥不潔ノ由緒」の有無に関する条件で、〈甲〉は5:倭城台の一方所のみである。これは先述と同様、文禄の役の築城跡、居留地設定当初の地ゆえであろう。1:三清洞、2:景福宮、3:社稷壇、7:孝昌園はいずれも〈丙〉であり、李朝正宮や祭祀施設の歴史的文脈、あるいは朝鮮人居住地域との隣接を嫌ったものと想像される。ただし、〈i〉:「周囲ノ状況ニ何等申分ナキコト、目ザワリナキコト」に対しては、2:景福宮が〈甲〉であり、「周囲ノ状況」がどの程度の範囲を指すかは不明としても、想定される敷地の前面に広がる景福宮は、少なくとも視覚的には否定的な評価要因にはなっていないようである。

〈b〉:「群衆ヲ納ムルニ足ル」敷地の広さも、〈甲〉は2:景福宮のみで、これは景福宮の北側の北岳山麓が他に比べてやや勾配の緩い、扇状の広がりを持つためであろう。また〈h〉:「市街ト都合ヨキ連絡アルコト、特ニ広闊ナル参道ヲ有スルコト」は、与条件と見られると述べた〈g〉と相対立するようにも思われ、実際〈甲〉は4:樊忠壇のみである。これら〈b〉、〈h〉については、敷地造成、道路改修などの人為的手段によって改善しようとの判断があったと思われる。

残る〈k〉と〈l〉は「外観」、「眺望」の対になっているが、それぞれに充てられた英語「プロスペクト」、「アスペクト」は明らかに逆である。これらは、遠望したときに社殿が偉容を示しうるか、そして逆に境内からの眺望が開けているか、という基準であり、境内

と遠方との視覚的な関係を問題にしている。

以上から伊東の検討において朝鮮神宮鎮座地(境内)に求められた特性(条件)がいかなるものであったか、その大略が了解されよう。ここで、総合評価を〈甲・乙・丙〉の数のみから相対的に決めるのであれば(表1右欄を参照)、最も〈甲〉が多いのは5:倭城台であり、ついで6:漢陽公園となるが、伊東の「決」では逆である(もっとも〈丙〉の数も5の方が多いが)。この理由を考えてみる。

表1中、5:倭城台より6:漢陽公園の方が高い評価であるのは〈e〉と〈l〉、つまり本殿南面および境内からの眺望に関する評価である。まず、必ずしも絶対条件ではなかった社殿南面についてだが、岩井長三郎は第二次選定の結果について、倭城台のように北面するに比べれば、6:漢陽公園の方が「勝る所多し」と述べており、やはり北面を嫌ったことが分かる。そして「勝る所」には、とくに「京城龍山の中間に景勝の地を占め、全市を下瞰して一眸に納め」うることをあげている²⁹⁾。また朝鮮神宮鎮座祭の翌日の『京城日報』に、鎮座地選定に関する次のような伊東忠太の談話記事が掲載されている。

……前有吉政務総監等は異論もあつたが、私は京城と龍山は将来一つの大都市になるとの予想の下に、然して一面には神宮が何処にあるか判らぬやうな始末では神威にも関係するから彼処[漢陽公園:引用者]を選定した訳である……³⁰⁾

龍山とは城外西南の漢江沿いに広がる地区で、城内の居留地に遅れて日本人市街も発達し、また一方では広大な軍用地を抱えていた。

図2 第二次鎮座地選定における候補地の分布

大正7年度になされた第二次鎮座地選定における7カ所の候補地の位置を、伊東資料⑤に基づいて示す。

「○」印に付した矢印は、当該敷地の場合に想定される本殿方向を示す。

「アスペクト」ヨキコト（境内ヨリ四隅ノ眺望ヨキコト）													
「ロースペクト」ヨキコト（外觀）＊													
市街ニ対シ火災ノ慮アル風ノ方向ニアルザルコト													
周囲ノ状態ニ何等申分ナキコト、眼ザワリナキコト													
市街ト都合ヨキ連絡アルコト、特ニ広闊ナル参道ヲ有スルコト													
市街地雑踏ノ巷ト隔離サレ居ルコト													
可成ハ清流ヲ有スルコト													
可成ハ南面スルコト													
小高き地ニアルコト													
鬱蒼タル樹林ヲ有スルコト、トクニ背景ニコレアルコト													
広闊ニシテ群衆ヲ納ムルニ足ルコト													
少クトモ不祥不潔ノ由緒ナキコト													
察神ト何等カ関係アル地ナルコト													

候補地	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	決	順	甲	乙	丙		
1 三清洞	丙	丙	甲	甲	甲	乙	甲	丙	丙	甲	乙	乙	乙 ^中	4	5	3	4		
2 景福宮	丙	甲	乙	乙	甲	丙	甲	乙	乙	甲	丙	丙	乙 ^下	6	5	3	4		
3 社稷壇	丙	乙	乙	甲	乙	丙	乙	乙	乙	甲	丙	丙	乙 ^下	6	1	7	4		
4 樊忠壇	乙	乙	甲	甲	丙	乙	甲	甲	乙	甲	丙	乙	乙 ^{中下}	5	5	5	2		
5 倭城臺	甲	乙	甲	甲	丙	丙	甲	乙	甲	甲	甲	乙	甲 ^下	2	7	3	1		
6 漢陽公園	乙	乙	甲	甲	乙	丙	乙	甲	乙	甲	甲	甲	甲 ^上	1	6	5	1		
7 孝昌園	丙	乙	丙	甲	甲	甲	丙	丙	甲	乙	丙	丙	乙 ^上	3	5	3	4		
8				甲			丙	丙											
土地ニ関シテ														外界トノ関係				外界	

表1 伊東忠太による朝鮮神宮鎮座地の検討表

伊東資料①に基づくが、若干の整理・修正を施した。

- 番号は伊東資料⑤にあわせて整理した。候補地「8 (VIII)」は不明。
- 表の上に記した評価基準a~lは、原資料では「1~12」である。推察を重ねた形跡があるが、このノート上での草稿の最終的な結果と思われる文面を再現し、縦書きに改めた。また、表下の「土地ニ関シテ」、「外界トノ関係」、「外界」といった評価基準の区分は、伊東がはじめに任意に列挙した基準を整理するに際して設けたものと思われる。
- 「要点」のk(*)には次のような但し書きがある。
「遠クヨリ望ミテ感動ヲ与フル程ノ外観ヲ有スルコト」
- 欄外右に示した評価結果の順位および甲乙丙の数は筆者による付記である。

図3 市区改修着手以前の京城（京城）市街

明治43年度測図、国務院幹部印刷の京城市街図（1:5,000）を下に簡略化した。正確には韓国政府による治道工事が明治39年度から着手されているが、まだ太平通、黄金町通の改修はなされていない。

図5 朝鮮神宮境内

第二次鎮座地選定のなされた大正7年当時の京城（城内南部）の状況に、造営成った朝鮮神宮の境内配置を描き重ねた。境内平面図は、『朝鮮神宮造営誌』（朝鮮総督府、1925）所収の「朝鮮神宮宮城平面図」に拠る。なお、比較のため第一次選定の境内位置も示す。

凡例

- : 市区改正路線 大正1年度までに竣工（下記I,II）
- - - : 市区改正路線 大正2年度以降に竣工（下記III）
- : 市区改正路線以外の道路
- ◎ : 朝鮮神宮鎮座候補地
- ()内数字 : 路線告示番号

- A, a : 総督府新・旧庁舎
- B : 京畿道庁舎
- C, c : 京城府新・旧庁舎
- D : 京城駅舎

市区改正路線の別および竣工年度

- I. 旧韓国政府治道工事費支弁
明治44 (2), (8)
- II. 総督府道路修築費支弁
明治44 (8)
大正1 (3)
- III. 総督府京城市区改正費支弁
第一期（大正2～7年度）
大正3 (1), (14), (21)
大正4 (15), (29)
大正5 (5), (11)
大正6 (8), (27)
大正7 (7), (9), (20), (30), (38)

図4 第二次鎮座地選定における候補地の分布および大正7年度までの京城市区改正の進捗状況

図は大正7年頃の市街地の状態を示すが、大正7年度中の竣工を含め、京城市区改正費第一期支弁分の改修路線を特に路線告示番号を添えて明示した。これについては『京城市区改正事業 回顧20年』（朝鮮総督府内務局京城土木出張所、1930）に拠った。矢印は朝鮮総督府庁舎、京城府庁舎の大正末における移転を示す。

上の引用には、将来を予想しつつ都市をより大きなスケールで捉えようとする観点が見られる。これは必ずしも検討表には見いだせない評価軸であるが、伊東の言からすれば〈I〉の眺望に密接に関連しており、実際、南山の西側の稜線上からは、北に城内、南に龍山の双方を見下ろすことができる。また引用の後半からは、神社が「何処にあるか」がよく判るような地形上・立地上の特性を、「神威」に関わる問題として伊東がとりわけ重視したらしいことが分かる。表2で言えば、〈k〉の「外観」に相当する。

他方、表1の下位についてだが、〈甲・乙・丙〉の数からは、3：社稷壇が最下位、ついで1：三清洞、2：景福宮、7：孝昌園の3カ所が同位である。しかし伊東はとくに2：景福宮を落として3：社稷壇とともに最下位としている。そこで2：景福宮が他に劣る点を探せば、やはり〈k〉と〈I〉、つまり「外観」と「眺望」であることが分かる。逆に、6：漢陽公園の欠点としては、伊東は敷地の幅が狭く奥行きが長くなり過ぎる懸念があることをあげ、岩井は石段の登り下りの不便をあげているが、両者とも、人工的に補いうる欠点ゆえ「外観」、「眺望」とするという意味のことを述べている。このように、伊東は評価にあたって12の視点を用意して逐一検討し、最後に〈k〉と〈I〉の対に相対的に高い比重をかけたのである。

以上から、大正7年の時点で伊東がとった判断は、まず将来的発展を視野に入れ、都市全体の拡がりに「眺望」および「外観」を介して呼応するような、視覚的な記念性を重視したものと考えられる。その視点からは、第一次選定で選出されていた倭城台は、明治初期以来の旧居留地、あるいは日本人社会にのみ緊密な対応関係をつくろうとする、視野の狭い判断に思われたのではないだろうか。

なお、表2の内容は、鎮座地決定後の伊東や岩井の発言と矛盾せず、むしろ以上のような説明を許容するから、最終的に総督府に提示された評価結果と大きな隔たりのないものであったと考えられる。ただ、それが政府の最終決定に対して、どのような点で、どの程度まで影響力を持ったかは明らかにしない。

3-2 植民地統治初期までの市区改正と朝鮮神宮造営

ついで、第二次鎮座地選定に関する上述のような見通しを念頭に置いて、大正7年当時までの京城の市区改正事業の進捗状況や主要官庁建築の配置を概括的に把握し、それらとの関連で第二次鎮座地選定と参道計画の評価を試みたい³¹⁾。

図4は大正7年当時における市区改正事業の進捗状況を図示したものであり、図3には市区改正着手直前の漢城（京城）の街路形態を示した。本稿は市区改正それ自体について評価するのが目的ではないから詳述しないが、両者を比較して最も重大な都市構造の改編は、第一に景福宮前の光化門通から南大門停車場までを一本の幹線道路として南北に貫いたことである（2・3番）。李朝時代より南大門は漢城の正門であったが、宮城へは曲線を描いて東へ迂回し、鐘路を西へ向かった後、北へ折れて光化門通へ至る形態であった。第二に重要な改編は、李朝時代の幹線である鐘路に平行する黄金町を東西の幹線として改修したことである（8番）。これらの道路改修は、併合後の市区改正告示に先立つ、先述の韓国政府治道工事費、総督府道路修築費によって真先に着手され、明治45年度までに竣工していたから、第一次選定時にはこれらは完成していた。これ以後大正7年までの市区改正第一期事業を単純化して総括すれば、おおむね光化門通（1番、幅員30間）－太平町通（3番、15間）－南大門通

（2番、19間）からなる南北の幹線を強い軸とし、その東方では、李朝時代には半ば迷路状であった街路を標準的な幅員（12間）を持つ基盤目状の道路体系に再編していく過程であったと言える。

景福宮から京城駅（旧南大門停車場）に至るこの南北の都市軸は、むしろ交通確保のため機能的に要請されるものであったが、同時に、京城駅から順に京城府庁、京畿道庁を並べ、最後に朝鮮総督府庁舎がピスタを形成するという、植民地政府の権威が集約的に表象される軸線でもあった。この意味での都市軸が完成するのは大正末年頃である。すなわち、明治43年に光化門通の突当り東側に竣工していた京畿道庁舎を例外として、倭城台から景福宮正面へ総督府新庁舎の移転、南大門通沿（朝鮮銀行前）から太平町通徳寿宮前への京城府庁舎の移転、そして京城駅舎の竣工は、それぞれ大正14年12月、大正15年10月、大正14年10月である。

一方、朝鮮神宮の表参道は、南大門に発し、すでに撤去されていた城壁跡に沿うよう計画された（図5）。この参道は、「朝鮮神社（神宮）参宮道路」として、総督府土木部京城出張所の設計・監督により大正12～14年度に国庫費472,000円余をもって拡幅・改修された。その断面形状、石段、欄干、街灯などは朝鮮神宮参道に適合するよう周到に設計されている³²⁾。

ここで重要なことは、朝鮮神宮境内が、この表参道を介して、上述の南北の都市軸の一方の端点に位置づけられることである。第一次選定における境内位置・参道計画との最大の差異はこの点に他ならない。朝鮮神宮は大正14年10月に竣工し、同月15日に鎮座祭に至っているから、先述の主要官庁や京城駅舎の移転ないし新築と定期的に符合しており、しかも新築成った京城駅舎の駅開きは朝鮮神宮鎮座祭にあわせて同日に盛大に挙行された³³⁾。こうした事実からは、総督府が、植民地朝鮮の首府・京城におけるこれら重要施設と朝鮮神宮とを密接に関連づけていたと考えざるをえない。もとより、朝鮮神宮の主要祭典における奉幣使としての総督の役割を重視すれば、総督府庁舎と朝鮮神宮とは物理的にも緊密な関係になければならない。これらを結ぶ道路が象徴的、記念的なものになる必然性の一端はここにありともいえる。

ところで、参道はこの他に「西参道」、「東参道」がつくられている（図5）。前者は表参道側から朝鮮神宮境内の広場への自動車交通を確保し、他方、後者は同じ広場と京城神社を結ぶ。京城神社との関係について付言すれば、第一次選定では京城神社と朝鮮神宮とは都市内の立地についてほとんど同一の位置づけとなるが、第二次選定では、京城全体を貫き総督府庁舎にいたる都市軸に朝鮮神宮が対応づけられることによって、都市内の位置づけの上で両神社の性格は明確に差別化されたと言えるよう³⁴⁾。

4 おわりに

以上、朝鮮神宮鎮座地選定の経緯を具体的にたどり、第一次、第二次選定の結論の差異を実際の都市空間の改編過程に照らして評価してきた。端的に言えば、前者の段階では鎮座地は明治初期から形成されてきた旧日本居留地に朝鮮神宮を対応づけようとしたものであり、後者はより積極的に京城全体の都市構造の改編過程に対応しつつ、朝鮮全土の統治機関たる朝鮮総督府との呼応関係を明示するものであったと言える。それは、朝鮮半島の総鎮守としての朝鮮神宮のそもそもの位置づけに、より忠実に応えるものであった。

最後に本稿の限界と今後の課題にふれたい。まず市区改正や官庁施設の配置計画と、朝鮮神宮の鎮座地選定の直接の関連を示すことは管見では資料的に不可能であり、本稿での考察は結果からの評価以上のものではない。また、本稿では鎮座地選定に関与した人物や組織の全体には到底及ばなかった。しかし伊東忠太による鎮座地検討の実態は、建築史家・建築家として近代の多くの神社造営に関与した伊東の、社殿形式にとどまらない、神社境内が持つべき環境の特質に対する考え方、あるいは都市計画への射程を含むこの種の問題への認識のありようを示す貴重な事例といえよう。

本稿は鎮座地選定を主題としたが、実際の造営事業遂行には、用地取得をはじめとする重要な問題があり、さらに冒頭に述べた南山の変容過程については、京城神社、京城護国神社もあわせて境内の整備・拡張過程をたどらなければならない。これらについては稿を改めたい。

注

- 「境内」という用語はここでは厳密な法的規定に基づくものではなく、境内・境外の区別なく神社の境域全体を指す語とし、その土地を「境内地」とする。
- 日本植民地における神社造営に関する既往研究としては、嵯峨井建「建国神廟と建国忠霊廟の創建」(『神道宗教』第156号(1994年9月)、黄士娟「台湾主要都市神社之様式」(中華民国建築学会第10届建築研究成果発表会論文集、1997年11月)があげられる。
- 日本植民地の神社造営と都市計画との関連を扱った研究として、孫禎睦「扶余神宮造営といわゆる扶余神都建設」(『日帝強占期都市計画研究』、一志社、ソウル、1990年、p.339～372)がある。ただ、「神都計画」はあくまで神社を核として都市計画が策定された特異事例である。日本植民地の都市はほぼ例外なく神社を有したが、法定都市計画上に神社が位置づけられることは希で、一般的には、法制度や計画図のレベルでの分析ではなく、より断片的な史料から都市形成過程の実態に即して神社と都市の関係を再構成し、評価を与えていく作業が必要となる。一般的な事例を扱った研究には、黄士娟「神社と都市との関係(1911-1935)」(中華民国建築学会第10届建築研究成果発表会論文集、1997年11月)があり、台湾の主要都市の神社の立地環境を類型化しているが、都市形成過程への視点を欠き、スタティックな検討にとどまっている。
- 五島章「植民地『京城』における総督府庁舎と朝鮮神宮の設置に関する研究」(1994年度第29回日本都市計画学会学術研究論文集、p.541～546)。この論文は、総督府庁舎の設置、朝鮮神宮鎮座地選定、市区改正事業について、各々が漢城(京城)の持つ既存の空間秩序や意味をどのように認識した結果であったかを個別に論じている。すなわち、物理的、視覚的な合理性やモニュメンタリティが求められ、既存の空間秩序や意味は意図的に破壊すべき対象という認識にすら達しないほど軽視されたとの結論である。なお、朝鮮神宮については、五島は祭神論にも触れており、神道家間で噴出していた塙君奉斎論を政府が斥け、天照大神・明治天皇という「最大公約款的な祭神」が採用されたことは、既存の意味や權威の利用を鎮座地選定同様に排除したものと示唆している。結論は大局的には誤りでないが、検討は関連言説の抜き出しにとどまっており、都市形成の過程と鎮座地選定の実態に即した評価はなされていない。
- 『朝鮮神宮造営誌』(朝鮮総督府、1937)。朝鮮神宮の創建経緯などについては他に、横田康『朝鮮神宮紀』(国際情報社、1926)、『恩頼』(朝鮮神宮奉賛会、1937)、手塚道男「朝鮮神宮御鎮座前後の記」(小笠原省三編著『海外神社史上巻』、海外神社史懇談会、1953)などがある。また、朝鮮神宮創立前史については、菅浩二「併合以前の『韓国の神社』創建論―御祭神論を中心に―」(『神道宗教』第167号、1997年9月)を参照。
- 『明治四十五年度帝国議会予算案』(大蔵省部、p.207)。なお、岩井長三郎「朝鮮神社造営に就て」(『朝鮮と建築』第二輯第三号、1923年4月、p.8～12)、および同「新庁舎の計画に就て」(同左第五輯第五号、1926年5月、p.2～6)も両事業の調査事務が対として着手されたことにふれている。
- 前掲・岩井「朝鮮神社造営に就て」(p.8～10)
- 大正8年7月18日内閣告示第12号(『官報』1919年7月18日・『朝鮮総督府官報』1919年7月23日)。
- 大正14年6月27日内閣告示第6号(『官報』1925年6月27日・『朝鮮総督府官報』1925年7月1日)
- 前掲・岩井「朝鮮神社造営に就て」(p.10～11)
- 日本植民地(広義)の総鎮守は例外なくその首府に鎮座されたが、その政治的な性格、奉常使としての植民地長官の神社参向などを考えればこれは総鎮守の所与の性格と言ってもよい。年代順に記せば、台湾神社(1901年鎮座、台湾・台北)、樺太神社(1911、樺太・豊原)、南洋神社(1940、南洋・コロール島)、

- 関東神宮(1944、関東州・旅順)である。この他、札幌神社(1871、北海道・札幌)、建国神廟(1940、満洲国・新京)も定義によって植民地総鎮守とみなしうる。『神社本庁十年史』(神社本庁、1956)などを参照。
- 前掲・岩井「新庁舎の計画に就て」(p.3)。なお、『京城府史』第一巻(京城府、1934、p.474～476)によれば、明治29年の高宗の脱出により事実上放棄されたかたちになっていた慶福宮は、総督府設置後、明治43年度より主要な機殿を残して他の大部分の建築物を撤去・払下する「整理」を行ったという。その後も、始政五年記念物産共進会の開催(1915)、総督府新庁舎の建設(1926竣工)、始政二十年記念朝鮮博覧会の開催(1934)などにより宮内は建築物の撤去、地盤面の平坦化といった変容を経験している。
 - 日本人による地誌・地方史類の記述をみると、「倭城台」という地名は文祿・慶長の役における増田長盛の築城跡であることに由来する、あるいはその可能性があると述べるものが多い。『新版京城案内』(矢野干城・森山清人共編、京城都市文化研究所、1936、p.28)、『京城の沿革と史蹟』(岡田貢恒、京城府、1941年、p.45)、前掲『京城府史』第一巻(p.278)、同第二巻(p.566～567)など。
 - 前掲『京城府史』第二巻(p.577)。
 - 京城神社の沿革については、『京城神社御造営趣意書』(京城神社御造営司、1926)、および朝鮮総督府文書『国幣社関係綴』(昭和16年、韓国政府記録保存所蔵)所収の「京城神社御由緒記」などによる。
 - 前掲『京城府史』第二巻(p.708およびp.327)
 - 大正4年8月16日朝鮮総督府令第82号「神社寺院規則」。これに基づく京城神社の創立許可は、『朝鮮総督府官報』第1141号(大正5年5月25日)。なお、京城神社と同様に、併合以前の日本人居住地における太神宮や遷拝所設置を起源とする神社は朝鮮には多数あり、昭和期の神社制度改革の動きの中で国幣小社に列格されたものもある。小山文雄『神社と朝鮮』(朝鮮仏教社、p.120～126)、『大陸神社大観』(大陸神道連盟、1941、p.43～46)など。
 - 前掲『京城府史』第二巻(p.633～635)
 - 前掲『京城府史』第二巻(p.665およびp.819～821)
 - 前掲『京城府史』第二巻(p.634～635)
 - 前掲・岩井「朝鮮神社造営に就て」(p.10)
 - 前後関係より、後者は伊東の父祐順の入院によって延期された後の日程であると推定される。
 - 総督府建築課長の岩井長三郎は7カ所の地名をあげており、伊東忠太資料と一致する(前掲・岩井「朝鮮神社造営に就て」)。この他の文献では候補地についての記述はまちまちである。前掲・横田『朝鮮神宮紀』には7カ所とあるが地名がなく、前掲『朝鮮神宮造営誌』では伊東の検討した7カ所に「神武門外」を加えた8カ所があげられている。また前掲『京城日報』大正14年10月26日(一面)の伊東談では候補地は10カ所位あったとあり、前掲・手塚「朝鮮神宮御鎮座前後の記」は京城以外に「扶余」も候補地の一つであったとする。
 - 前掲『京城府史』第一巻(p.43～44)によると、明治41年7月、勅令第50号「享祀二閣スル件」により「政府の所管」となり、大正11年10月には「京城府は政府より同壇及び隣接地を合し六萬六千六百坪の移管を受け」公園として整備した。ただし、ここにいう「政府」は前者が韓国政府(統監府保護下)、後者が総督府である。
 - 前掲『京城府史』第一巻(p.632～633)。社稷壇の場合とはほぼ同様。大正8年にやはり京城府が移管を受けて公園化した。
 - 岩井長三郎「朝鮮神社の奉建に就て」(『朝鮮と建築』第3輯第4号、大正13年、p.15～17)
 - 前掲『京城日報』大正14年10月26日(一面)。
 - ここでは主に『京城市区改正事業 回顧20年』(朝鮮総督府内務局京城土木出張所、1930)および『朝鮮総督府施政年報』(朝鮮総督府、各年度版)を参照した。
 - 南大門より城壁撤去跡を改修した朝鮮神宮表参道については、朝鮮総督府文書『大正十三年度 朝鮮神宮参宮道路工事』(韓国政府記録保存所蔵)、『大正十四年度 朝鮮神宮参宮道路工事』(同左)があり、平面図、断面図およびその他の詳細図が含まれている。
 - 『京城日報』大正14年10月16日(第2面)
 - なお京城神社は朝鮮神宮鎮座後に社殿建替と境内拡張を行うが、氏子間で鎮座地選定をめぐる論争が起こり、助言を求められた伊東忠太が「京城の市民の氏神であるから民衆的であるのが望ましい」として市街地に近い方の敷地をよしとする判断を示している。相沢啓二「京城神社の設計に就て」(『朝鮮と建築』第7輯第5号、1928)。なお、朝鮮神宮鎮座以前は、京城神社は李王家および総督府高官の公式参拝を受けており、この意味では朝鮮半島総鎮守の意味を京城神社が部分的にせよ担っていたともみられよう。朝鮮神宮鎮座後は、京城神社は京城府および京畿道の鎮守として位置づけが明確化されていく。

(1998年9月9日原稿受理、1999年1月28日採用決定)